

週日の説教

金 大烈 神父 2009年12月3日(木)

《すべての人に対してすべてのものになる》

昨日から体調が悪く、2年前にインフルエンザにかかったときと同じようです。お風呂で汗をかき、一晩休み、寒気はなくなりましたが、他の方にうつすことが心配ですので、しばらくの間は、赦しの秘跡は休みます。ご理解ください。

今日は私の祝日です。痛みで苦しんでいる人々の気持ちを理解できるように、ぴったりのプレゼントを神様からいただいたのではないかと思います、感謝しています。

今日の第一朗読(1コリント9・16 - 19、22 - 23)の使徒パウロの手紙では、カトリック教会ではものすごく有名な言葉が語られています。それは、「すべての人に対してすべてのものになりました。」という言葉です。どういう意味がお分かりでしょうか。易しい言葉なのに難しいですよ。この言葉は、福音を述べ伝える人々が持たなければならない心のことを言っています。つまり、全ての人々が福音の対象になるのです。例えば、自分を殺そうとする人に対しても、何とかして福音の美しさを伝えなければならない、ということです。そういう意味で、殉教された人々は、自分達を殺した相手にも何かの変化を与えたのではないかと思います。

実際には、このような「すべての人に対してすべてのものになりなさい」という言葉は、聖霊の働きがなければできないことです。福音を述べ伝える人たちも人間です。感情も持っているし、気が合わないこともあります。しかし条件なしに、全ての人を抱きしめなければならないのです。そういう難しさがあります。それでも、2000年間のカトリック教会の歴史の中で、「オムニブス、オムニア。(Omnibus omnia; すべての人に対してすべてのものになる)」という言葉は、叙階される時の聖句として沢山の司祭や司教が選んでいます。

私は、この言葉を忘れたことがありません。「この言葉を忠実に守っています」と言える司祭は、上手に司祭として働いていると思います。しかし自分のことを考えると、そうではないところが多いことを反省します。

先日の司祭の黙想会で出された話です。考え方が大きく二つに分かれていて、ある司祭は、「信者ではない人々に福音を述べ伝えるのが自分の召命です。」と言い、別の司祭は、「自分が預かっている信者を世話するのが私の使命です。」と言っていました。全く反対の二人の意見を聞いていて、私は、分けること自体が望ましくありませんでした。私は、宣教の90パーセント以上がこの小教区でのものになっています。しかし、信者でない人々のためには何もやる気を持っていなかったことを反省しました。

「小教区、自分の教会のことが使命です。」という人も、「信者でない外の世界のがっかりしている人々に福音を述べ伝えることが自分の使命です。」という人もいます。しかし、「どちらも同じことではないか、そういう区別なしに一つに見なければならないのではないか。」と思いました。「もし私たちが、忠実に信者を守り、世話しようと思うならば、外の人々のためにも当然関心を持つべきではないか」という説明をすることができました。

今日の福音(マルコ16・15 - 20)や第一朗読を黙想しながら、好みであるか否かは別にして、すべての人に対してすべてのものにならなければならない。そういうイエス様のみ言葉が、各自のものになるように力を注ぐべきではないかと思ってみました。

ありがとうございました